玉の緒

巻一

特35
868

014382-001-7

特35-868

玉の緒

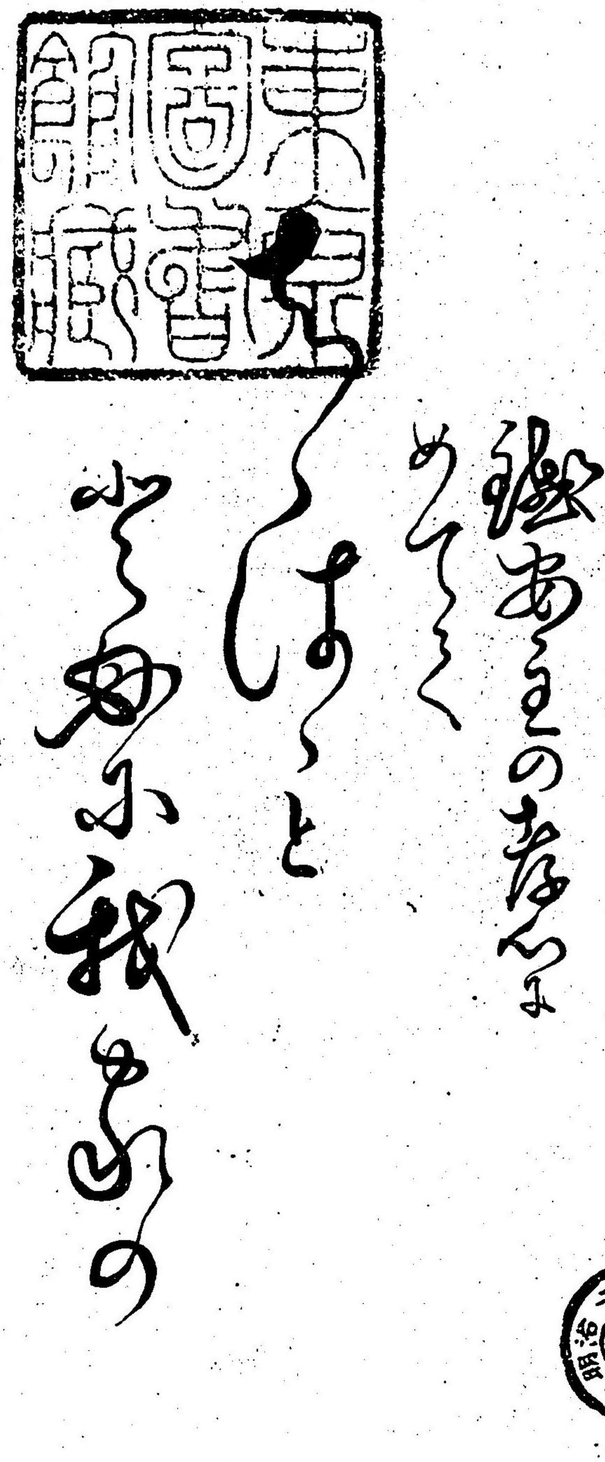
坂田　安治／著

1冊（53丁）

M29，32

ABB-0747

特35
868



玉の緒序

わが家祖井上正鐵大人ゆゑなくて
流伊豆國なること宅流に配流されしまゝ
事は世の人くも熟知せる事なれば今さらに
いとざらなど当時彼地より人々のもふ書示
おこせられし文甚多し其が中に予が父祖の
ものする書ものをたゞめて他なく父の存生中
写置るなれば此書朝夕に謹読し居し
物ものを世家門中の人々に見よとてかく極本

り物して世ふ公にたる事となれるくて
巻既法雖の文はけるもいまだ遠島船出のおに
揚屋の中より出ることを能はず皆天保
十四年より嘉永二年まで彼鴻の時乃
使りに託けられしものなれば一句一言も
千里の海原をへだてくらのくをるはらぶく
教導りに真情のかなくたるとそふ
あるれらの書を見むくよく教祖の
意をうかがひ一生懸命の道の旨をもとに

横さの生まれけるもあらば教祖の神霊もかれ
らびあるべきもとめたべし安治りこみ
て書の名を玉の緒と號けるまたく
此道の栄えを祈りまつに一言かきそふ

明治二十九年六月二十日

禊教管長坂田安治

角田和雲書

玉の緒巻一目録

法郡　一丁　保木百主人
慈のこと　三丁　藏安
祭文　四丁
たゞかゞこと　六丁　大木野主計
教育　八丁　正常
解脱　十二丁　尼妻女
被分源　十五丁　武亂
父子の顕幽　十七丁　正久
物知こと　十九丁　武亂

論語よこ　二十三丁　武亂
脫　二十四丁　正久
腹立こと　三十丁　きく女
一つん　三十三丁　男也女
分分　三十五丁　藏秀
光陰矢のごとし　三十八丁　栖原庄助
四命四恩　四十一丁
主人の定　四十四丁　武亂
生子教子　四十七丁　祐藏
奈志の文　五十丁　信

同孫終

東京都立中央図書館蔵

天保十四年十二月の事也

玉の緒巻一

法弘

徽教管長坂田安治撰

以百ハ百書面計下示相見仕ハ以交遠湯ま
作付られハ事法ん上の〳〵ハ七年ハ前よ
里かゝる事のあるハ覺悟い〳〵ハ事まハ
へども淺ましや今更ま弱るさぬるんこそそ

このなりけを法華の祖師日蓮い遠流ふ逢
ふ事二度首の座ふ着く事一度剣難二度少
難数ゝをびと吟くゝ又諸法を弘むる者遠流
の難ふ逢さるいあらじゝゝゝゝゝも恐多け
きど神若い天下万民のゝめふ九死を出て
一生を期る事十八度と仰せらを張ふときゝ
く弟ゝべ等ごときの者天照大神の御
法神國の神道のためゝ身を捨妻子を捨天

下泰平國土安全万民安穏のゝめ東照神若
の御徳を仰ぎをゝ上下安こらん事を願ひ
奉らをるゝい命を惜まび神明ゝ仕をらん
いいと難みゝ事なゝびや此難成就い疑ゝ
てあゝじ神明の指ひなをば必をゝ宋就
の時あゝざらんや日月い地ふ落大山い崩を
て海ふ入泥と成とも此神の指ひい遠ふて
とあるべからび

天地の極ひとしれぬ人いうなる波長二神
の德といふべし
古歌に
風い息吹君宮い心日いまなこ海山うけて
家方なりけり
昭中こ家義正座ハへども亦く一神上ハ以上

正鐵

保木冒

東京府下南豆立郡
渕江村大字保木間

坂田正安翁也即安
治カ祖父ナリ

主人へ

然のこと
然と中事正弱ニ付中上ハ然と中ハい我思
ふ様ニんの侭ニ致度ヲ正座ハ凡夫い
金銀をこらあらぞんの侭ニ成ハと存ハへ
夫い浅をとの成事ヲて金銀何程あ生てもん
の侭ニい成ふ中ハ生涯ハ貧書ニ中ハ

支拔神の正教ゑい金銀を寶とい世法法を
宝とす法ざゑあゝぞ金銀い自ら足るもの
まて正産い法ゞなけきぞ金銀何程みても
心の修ゑい成ふゆい金銀不足と思ひ心の
修ゑなゝぬい法のふ足より殺生ゆい法の
修り出来いへぞ自ゝゝ金銀い足生ゆい若
ゑい先祖神の正教ゑい寶を法と定め法の次
い人人の次い土地まて所産い金銀い浮世

の宝まて神の方まてい宝の未まて正産い
たゞ九支い氏金銀をのゝ宝と存い百様く
の災ひ生じ身を苦しめゆい事まて正産い
支拔世の中の怨と中いい迷ひの種まて災
ひ苦をもとめい程まて正産い程亦委細ま
中拔い へども正少子腫物まて長産出来
不中い百ゝ後仮ゑ中上い以上

正鐵

前注正安翁ノ男ニシテ安治ノ父ナリ

緒安殿

祭文

生とし生けるもの熟きう終なのらんやたとへ百年のよはひを経るとも過なぎ一期の夢のごとし徒らに世を送らんよりい君父のさめる命を捨てぬるいいとをぞときを教へ給ふ法の為に身を投棄人の苦悩を救ちんぐる為命を捨ふしい家い人なれど家に出て立て家を導くい万人の模範として多世までの亀鑑なるべしあ人の命い上なきの寶なり空しく老に至りて人ふ疎むぜら世をうらくこかこちて生なのらへんこそそこのなかりけ生若神の御徳に

てもく世とぐまりなぞ家父の口ずさ

こゝごとく

世よ居世ぞうく旬ふ秋なをび

うく諭給ひしいとも苦しと思ひ出し侍

いふしへより知らぬ唐國又ハ凡も世ぬ昊

國の哀などふん迷ひて後の世の為とて命

を捨すしへ人ハあをぞと皇國の神の広哀の為

よ命を捨世の為よなをこのしと勤めしへ人ハ

千年の古へよ偖へ少偖らん故よ今神徳を

よろこびて雲を怒り出く式哀の守神と敬

しゝ侍る正織情うゝてこ事を挙門人子孫

の栄えん事を願ふとのなを

思西名神の誓ひよの星は船天照しまを

神のまゝよ

たゞかつまこと

六月出の広書面ハ屈被被見ハ出ハ広信ん

以望間以修行のよし大意不通てくいに少子も
をゝ修行孝至いに冥に安意ゝ注下い
一初產靈に傳中いよ付に よろこび に中越
氏上產靈に修行冥一よい產靈に修行と中
い悪きよ結ゆ善ゝ悪きんおこ產いに人を
居き緣よ結びた事ー教諭ー中い事ゝて に産
い人を教諭いよい親の子を青いやうよ意
態ふこのく己きを捨て人のんを察ー思慮の

得思兼神
左大史正六位兼
行算博士阿保朝
臣經覧

於蒙飛加祢多波賀
利許度乎勢佐梨勢
波安万能伊波度波
飛羅氣佐良万事

神徳ならでハ動ふ中い古を歌よ
思ひゝねたゞこのりごとをせざりせで天
の岩戸ハひらけざらまー
たゞこのりゝとゝ中い神代巻よ方仮このやうよ
文字書中い仏法ゝてハはうべんと中い神
道ふてハたゞこの道と中他の人情を察ー中
い事ゝてい氏意を能く に考に修行なさる
べくい悪角振の子多く出生致い損なさる

へくに百姓内室様へもよくくに論て云成
に陶分の子い嵩よ成ゐ中にとゝく法子を
百姓生百産に様百ん勉て云成に百姓出生の
上ハ子孫百中越て云成に百たゞ孫の出来に
をたのしこゝ百立に
一茶呑十人ゐ土瓶二つ百送下さを示存に
百神ゐへ桐俵門中寄合の為ハ用中に
一嵩地へ神明宮百地取こゝらひ中に付

金弐朱百寄附云下是示百祈念中上に右よ
付限く入用も百産に百百寄附他面百拵へ
追く出来に様百計て云下に百回り中百ハ
渋も云下百に地取求めにハ餘程の金子
入用よに百何分軽入に尤地面宝ゐに取へ
少く手金壱ゝ至中に弐上の取百ハ渋他力
雄の神徳軽入に色く中入百へ共又く坂
仮よて中上に軽首

九月　　正徹

大木野主計殿

教育

上略

一兎角子弟ニ限ル成長致ハヽ付要家事計ニ

覚え申困のよし申たの事ハ申産ハ是ハ考

見申修行の種ハ先上ニ申事故定めて申困

の事と存ハ論語ハも唯女子と小人とハ養

難し是を近づくるバ不遜なり遠ざくれば

則怨む孔子もかくゆゑさきハ聖人さへ難き

まゝ給ひしと見えたゝ然るバ家くのゆゑ

ハ実ハ困ハ事ハて申産ハ申傍神道ハ志賀

嗚呼の荒びハ給ひしハ依て天照大御神岩戸

開ハたまふ種と成素盞嗚尊ハ岩戸穿

の事あるべからず又山田のおろちなくバ

素盞嗚尊稲田姫を得て正睦しく正心清く
とし給ふ事あるまじくは尊兄も毫右卿人
と成はて〻修行出来はして邪為事めでた
きす是ヨ迄べうら淡少子も当地へ来て年
若なる女子の人のまはあまたたるものを
もらひ妻にし支を教諭し修行の種と致
ぜべくとん勉初と中者を貰ひは正実よを
はあまはヨ如何致べくやと日夜はんを尽し

はてもは少も教諭を用ひぜかへはてうらう
又我まゝふ成行はて何とも致がとく変よ
おひてお少子も実ヨ乱不徳成を知ヨ又幼年
の節より不孝不忠を成したるをよくく
考はへば生通なりと存今こそ若年の時の
罪咎亡ぶる也と存恥びやはは志このし恥びて
ハ見るとめゝ又今日ヨ困やはは和式節ヨ至
少くん付は事みくいさゝうち教の立は端出

来中に夫と中もおのすすていなく矣法爲
信心の足らぬ故すてい右よ付尚節布計麻
尓の法儀行致に式ふとまふと中ゑい神道
の大事よすて天下國家を治るの第一天照大
御神の御威德さのんなるの法之かくい存
居に取そ者ハ得に へども未たしこのなる式
法を儀たらざるを式爰梅辻と中者を神
明よ足式地へ出老しるづろよ三日三夜よ

して告ふ郡り京賀茂明神分雷皇大神宮の
神儀わ授足初めて布計麻尓の出法明らよ
して夫よりり日くわ勤に へで生功よりて
初ゑ表諭よく届にたぐ岩戸開出来て中と
存に釈迦も摩婆成佛致に よ付寂光浄土を
開に事よ出産に留生兒も爲右弟一人實の
信心者よ成中にハ ど生兒出開運の時と思
召さるべくに皆向ふよあるよいあらぐ家

杉山秀三氏也

ふあるまて店は右ふとまゝの事ハ男也
秀三方へ荒増申聞ハ是ハ蓋雲の僧の上な
らでハ分ま難き事ふ店は
一ハ家業ハ子等多き由ふ店は修行意ま
故ハの由夫ハ留遠まて店は家業ハ子
等ハ世話が重ま信心の修行まて店は信
心修行と今日の家業と二つまならぬやう
ハ心をま計成は唯一つまて店は

一ハ内室様へ別ま書状是上マ中の取宜敷
ハ僧云マ計下は宮めて今日の子ま取まぎ
れハ心忙しく店あるべくは心ま任せ
ぬ事ハ産はまぐハ中載マ計成は修行の
ハ心をて中上は子くふ俵

正常様　　正織

解脱

山為下さを拜見致しは先は皆く様に信心
は修行の由大変ふるこしは少子事もそなる
修行五年立は百日安泰に下べくは伝載され
は

守入ましたゞけきどあの
守入ましたは神の御霊を頂きは徳まて信
心のあらたれはまてはけきどあのは未だ

凡解之更を解説致はゞ修行まて百度は生
解説と申事はとけもぬあると申事まて解
は氣質のかさくなゞとけ申はまては脱は
解のぬけかをは事まて蟬のぬけうをり
又がうふらの数まで成は極を申は面影まで
習是又は悪桐若桐と成申は事ふ百度は人
桐の書まる若桐吉まあらば悪桐凶まあらば
己ゞ一心定る取をはて吉凶の桐を生ると

あり誠ヨ孤ろ事ふらぐや孤をバ恵相といへども何の患る事あらん修行の上うらハ必吉相と成べし

ぞうふらやや天水桶を一世界

花下大明神の句ヨ

嵐子と影嗚かをす雀の巣

心誠ヨして振氣誠と氣誠ヨして振行誠と行誠ヨして振辨正し辨正しく志て後人我言を用ひて國も安く成べし振ヨ信を將て後我ふの恵義をしを辨のあしきを知て後人我を用ふ人我を用ひて後ふ安く辨て後國家安全也安全して後ふ安く辨ゆたろふして神徳明成べし我ふの恵く行の恵きを知るハ解説の始なり差ふよしと思たバ解説なく陰く暗くなり神明の加護うをく成べし毎度の口ゑ方使りハ六

左清四郎殿へ申上ゐ血脈の子の事打忘れ
申ゐおつる事除くゐ世話あるゞたしといい
ふゐ世辞まそ志ん実ハ篠を次第まるゞ
よいまと思ゐ不孝ゐいろ〳〵申上ゐ
へども強ゐ何も思ゐの事ハゐ申越上ゐ
べくゐ筆の及ぶ丈ハ申上ゐ

三月

お花を様　　正織

罪といふを都々美
の約束たる言まそ
都美といふを都美
ハもと人の悪行の
みまハかぎらず病
諸の禍又穢きこと
醜きことなど其外
もまべて世まるゞ

被対源

上略

ゐ持病まそゐ昇せのよゝゐ中越委細まる承
ゐ病とゆとのハ皆罪障より起ゐ若まそ
ゐ産ゐ生内脇を縦ましゐ病ハ罪軽く心を
縦〳〵ゐ病ハ重く思眛なるも見あゝきも
氣出さも拘弱きまるゐ外心の安うらざ

〜とゝてふくこゝき
らふ事をみゝ都美
なり

るも皆こゝ病ゝて腹中の正しゝらざるゝ事を
おこ里中ゝ事ふゝ産ゝ氏病ゝゝ事を里中ゝ
へゝ神ともあゞめ責むべくゝ生病を正しゝ
ため被僧行いたしゝ若ゝ産ゝ又薬を綱
ましゝ病ゝ我計り苦しゝこゝんを悩ましゝ
病ゝ人を苦しめ家を破里國をみゞすゝも
里中ゝ扱ゝ病重しゝ中ゝ養生病ゝ正
成ゝ弓爲用ゝゝ生被ゝ被身滝の

外ゝなくゝ生と僧行と別ゝなくたゞ一
つゝゝ扱ゝ唯一の表と中ゝ事ゝゝ産
ゝ僧行のゝらゝ被又聴聞のみなく是ゞ
ふ怠なくゝ勤ゝゝ万事お調中ゝ尤生商ふ
んゝあるべしゝ病の業しゝゝ僧行のうゝゝ
被怠里なきものゝ皆正るゝて起里中ゝゝ
て産ゝ日ゝ表て成ゝ必薬より一服ゝ
く敬中ゝ若常ゝ被僧行おこゝりゝ人病

穀りは　は　蓂至中はまて百産は彼修行大事
空しく志このし若支はをりは小事も空しく
は又大食美食は病を生じは元より百産は百
情て弦成は廉食小食よろしくは
一三種彼を三光など中事唯一の教より法さ
事ふは
一地水火風空ふど中ふは佛家の説より百
産は神道ふていは木火土金水と中は志このし

なこのら矣張理を極はまて空しうら侯たぐ
神変ふ思議と存はて百修行さへ弦成はへ
べ自らふ分至中は修行つこはへべ神の百ん
も分至はやうふ成中は左様成はへべ変化
自らもこの至中は色こ中上及はへ共出船
あれ迄又こて中上は不俄

九月　武胤殿　正識

父子の顯幽

上略

春中に書面の節に隱居に心を寄せし由
に申越候く那る事ふに座は二代孫三代孫
へ代に讓り遊は未だ四十餘の時の
よし三代孫は十五歳の時と承は三代孫
は表向の事に勤二代孫は内の事に勤内分

大己貴尊は天孫臨
の時ふ此葦原の中つ
國は命のまにく悉
ふ奉らむ云々　然
して天神の御子天
下を治給ふ僕
百たらぬ八十垌手
ふかくまて侍なむ
とあまて垌手は隅道
なり侍は何事ふま
れ心を付て伺考居
をいふ常ふ物を守
ると云も此意ふり
神代巻ふ即射狭磯
之八坂瓊而長隱者
矣と見也

孫なるへ氏國土を譲まて皇に孫なるは顯の事
に届の模承は神代巻ふは大己貴なる皇に
を司り大己貴なるは幽きたる事をつこのさど
まて給ふと座は則隱居は大己貴なるの神まて
ざまて座は大己貴なるは分ふ八坂瓊をか
け道のちまく〳〵ふかくまて給ふと座は
道の御くといふ人道ふふく迷をぬやうふに
守下されはと申事まて座は隱居の思

八坂ハ彌真明と云詞の約きるまて曇りふく清く明かる玉をいふ

呂玉極冥しくは産は一日も早く産宣社成べくはかやう敬ゝ攘夷て中と思ふはと中中思ふ損ま成ふ中は百たゞ生候は攘夷冥

爰は産は親の心まてはまゞ年若西系行届

このぬと思ふものも行届く損ま神明の御守

神武天皇凶徒を討滅して畝傍の橿原の大宮ふ鎮座坐と

夷は産は者まは隠居の勤と中まは先祖を祭は

して鳥見の山中ふ皇祖天神を郊祀ら

夷は産は一の勤まて産は生先祖を祭は

方ハ限く心得のある事まて産は式事ハ

追遠反始の大孝を申べ給ひ御世御世の天皇天日嗣知食てい必も皇祖ま大嘗ゝ給ふ誠ふかゝこき御事なり

隠居の勤方まて大切の事は産は百委細

本ま恩め跡より差上て中は何も来表初夜

の節差上て中は百左損思ゝ社成はまゞ

支迄ま仏を社成は　下畧

申九月十二日　　正鐵

正久損

庭ま茄子植付はて

後世孫ゞふ身ハ振安ゝたねなをび

府下木下川村

村越治郎兵衛氏なり即鐵久氏の父也

後の世を祢ごのふんのたねなもび色をも
香をもまて累よけ里
退君氏節ハ代官江川公ハ渡海尚為よハ
逗留よてハ庭ハハ評判宜しくハ流人
二人ハ赦免よわ成氏船よて帰國致しハ
後寛為掛思ひ出ハ察て致下ハハ上

掛知こと

上略
何事も掛知ることあしきとやよいをしハ
ハ保掛知ハ行ひ出来ふや掛よハ庭ハたゞ
ハよ覚え口よ言のこよて我身よ行ひハ事
出来ふやハて人斗里をかく行かく勤よと
やし已行ひあしき掛よハ冒きらひやハ我
僧行出来ハて後よ生道を赤へ生道理を人
よ教諭しハ事ハ夫の掛知よハ庭ハ是を智

濫とやいて邪なる人なる位は掛知なる成人なる
まさり勝きたき念出やいと身なる引受行ひ
い事なくて人斗なる苦悪を見出やい事なる忘
きらひやい我行ひの苦悪を見極いい神智
まて邪なる事なる位は神道ハ本なれバ委敬
存い事冥しく唐の学問も天竺の教も冥し
く位は先我心を清く致し神徳を將行ひ
神明の位心なる叶ひい事なる一なて夫より退

退出来いなるハ冥しく位は己ゞん中不浄
まて行ひあしくたゞ模くの事のく覚い事
ハ悪敬とやいて位は掛知とやハ口心
でこのなる弁へて身なる行ひ出来なやい者を
やきならひなる位は
一書画の事ハ神遊なる位学い事ハ冥敬凡ん
まて学い事ハあしく神遊なる位学い事ハ尤
好むべき事まて位は神遊とやい事ハ人

を導き助けむ為に学ひハ神遊に在ひ已
よく書く人に賞らるを尊ぶと思ふんにて
学ひハ孔子の遊ひに在ひ又心を静めむ
ぐため書画を学ひハ是亦神遊ふて在
ひ

一に同つ中に問ひ事ん若しく思ふひの由
夫ハ孔心にて悪く在ひに同つ中ハんに
至なく実兄弟よりも厚く思ふんの底迄

もあこの一所わ筑所問合ひ事要用なり夫
を信んわ續とも中ひ又智者に問ひハ安く
愚者ふ問ひハ出来悪ひ者に在ひ愚者に
能く問まなびひ事ハ神の在んに叶ひ中ひ我
に同下のものに問事を好こよく若悪を
弁ひ中ひる要用の事ふ在ひ目下のもの
に問ふんなきハ慢んのきざしにて問答
書ふ在ひ通り神明に隔たること天雲の

ぬくまは庭は　下略

右は尋の麹荒場中上は中く筆紙ふ尽し

がまくは祭て社下は男也秀三野沢慶次郎

杉山秀三氏野澤鐵
敬氏坂田鐵安なり

次郎兵衛池田屋など初產靈もるし中は此

村越正久氏也

者どもへ

反主斗へも初靈產もるし中は此者どもへ

遅くは和漢は尋はをゝ冥罰は夫まて分ま

悪は事も此產はをゝ幾度も品弱て社下は

筆紙ふ及は迄ハて中上は拙くよき品弱ま

祈りよろこび中は此書は同り中へも品ま

せは和漢て社成は古語ま祀ハ志もくのあ

たまかまと中事は產は又古河ま

問ていふとをねばいをぬだるまどのん

の内ふ何んあるべき

問人のあるぞうれしき法の道我急りも

思ひ出せまを

三月　忍獄

府下竹塚村河内久
藏也

武亂殿

論語よゝこ

上略

以尋常下い物の理ハ弁へ成度思ふハ中
越ハ産ハへ共夫ハ尚流ゝてハきらひやい
事ハ産ハ生沢ハ理分ゝるハ生業出来
不申ハへバ世よいふ論語よゝこの論語ハ

次ゝて産ハ業ゝ出来ハて後ゝ道理の分
ゝるハハ宜しく産ハ理分りハとて業の出
来ハゝ雑きものゝ産ハ夫故理を極ハ学
びハきらひやハ被ゝ修行身の穢不浄と
れハへハ明燒のごとくゝて万事ゝ通ドヤ
ハらものゝハ百身の穢をおとしハ修行ゝて
産ハ極の理ハ分らぬ事ハ先ハ生て迄な
さるべくハ身ゝの穢さへとをハへバ自ら

明らゑ成中は故を思ひまして百姓行なさるべくは夫故一ゝ百答ふ中上は　下略

正徳

武亂反

脱

脱と中事ハモヌケルとよみは文字まても
ぬけいづるといふハ菜虫の蝶と成蛇のぬ
けかをるなどゝ中事まて佛家よい解脱なと
中又凡夫の佛ゑ成はを度脱と中は毎くを
ぬけ上達致は事まて百姓は見い信心の上
からの僧りゑ百姓は凡夫ハ難ゑ逢はへバ
いよ〳〵迷ひ若〳〵中は僧行の上ハ難ゑ
逢はへバ弥信心剛盛ゑ成必ぞ祝けて中は
若迷ひて疎く成はをゞ祝けまじくは触
くはんはるべくは

一法子未だ出生せざる由式部は遁こは出
生もみさくはや死交は法子生をゐやはへば
慈悲のんを生ぜぬものは産は慈悲なく
はへば神徳を身よ交る事もなくは神徳を
蒙らざれば身も安く家も安くとやまことと
成邪くは法子を出生彼はよい縁ある者よ
始まりやはは縁ある者とやは我より智落き
もの貧なる者は産は唐の文王の徳は鰥

寡孤獨よりたゞまるとやは憐むべきは迷
ひて生身を苦しめ人を苦しむる者こは是を
世よ悪人とやは是程あさましなる者はあら
ず盤谷和尚の踊うたよ悪をよくむを若ど
やと云る悪むんぢ悪どやものとやはたゞ
悪き人まよ迷ひて今日を送りかぬるもの
こそ憐なるものよはへ又大石を動をよは
生そばの小石を動はへば大石も動き出

るものよい悪なるもの迷ひしものを
もの悪人を憐きと思ひ導引助け救ひいへ
バ智者名士福者若人志ごのひ来るものゝ
至時ハ至神法を授けいへバ神徳一時ヨ
廣至中ハ者ヨ広庭ハ扨悪人迷ひし人我力
ハ及ざる者ヨ近よきだ已ゞ神徳を失ひ中
ハ扨力ヨ及ぶおよバさるを計るべし悪者
災者ハ吋患なし故ヨ悪を導引を以て始と

しを者ハ施して縁をもとむべし右ゝ道中
入ハ道理を考中入ハヨハ至ゝ少子今迄
心を以て行ひ身ヨ神徳を受ハ事を中入ハ
俄ハ心を胡夕ハ動あらで必ず身ヨ神徳を
受給ふべし色ゝ中入受ハへ共又ゝ援使ヨ
て中入ハ分至悪ハ事も広庭ハをゝ広尋て
改成ハ
一ハ神前ハ祈念胡夕ハ動のよし大変不正

後鳥羽帝承久元年清原良業勅を蒙りて神託及聖帝の金言公武の忠言を記禄せしを此書ハ本朝論語なりと仰出されしより以来人皆倭論語といひ終ゑ題と為もとあゑ

らいは生節和論語ゑよ上のよし夫ハ悪きとゆゑハ善くハ共ゑ凡合て弦栄ハ生扱事もあらし又ハ生時ゑよりゆハ人ゝ志を書あるしゆハ事扱中ゑハ信んき人の中事もあらし悪ゑんゑハと害ゑ成ハ事もあらしてゆハ志このしなゞら人ゝ氣質の遠ハ若扱皆同じやうゑハ系ゑふゆハ氣長きもあり短きもあゑ剛あるもあゑ弱きもあゑ人の面の智るゞやくくまて正産ハ色ゝあるゞ冥しく正産ハ生扱ハ互ゑ持合ゑよらざるものゑふ正産ハ又爭ひもあるゞ冥しくハ互ゑ吾乃へ導んとての爭ひゆゑよろしとゆハ悪乃へ導んとての爭ひハ悪くハ兎角我心の模ゑせんと思ふんゞあしくハ笛太鼓玲瓏拍子木色ゝ言いろ遠ひハへども融合ハ変面白くハ小太鼓大太鼓何きも言ハ遠

いへ共合いに変おもしろくいに成ぬよくく
に考て社成い緩き人もあるを急なる人もあ
るを腹立かきさもあるを服立ぬもあるを色こ大勢
打寄いてちよふしの合いがおもしろくい
東照宮様に代官より佛言力鬼住久右左な
しの天野三郎左衛と中事に座いに三人故
事に政事糸をい由三人よて争い事毎く
ふに座い又神代巻よハ伊ざなぎ伊ざなみ

二神あらそひて道の成い事に座い男ハ陽
女ハ陰遠ふがよくい老い止を若きハ動く
是も遠ふが冥しくい男女老若同損よ成さ
んと思ふんがあしくい寇角思ひうねの神
のにんぜ行て社成い
一我慢と中事に殺害のよし邪を事よい我
慢成も慢神へにまろ世中い事よに座いい
ろ〳〵の氣質の者集いも神のなさるゝ業

よて郡内事ていと思召て法度は
一送り掛世話し義は付秀三事も色くん配
致中は由中来は扨くろやうの世話とゆも
のハ雖も郡義成とのは庄は〻共光兄
にも骨折は世話て法下は上野一条生上
は送り掛迄し義は骨折ちゝ下は援中上はも
あまりんなき援思召もてゑくは〻共外は
新入は仁も迄くは何分は面倒新入は来は

付ても早く海國は内中へは礼は幸にも相
勤及存は迄察て法下は
恵むべき子はめぐまるゝ氏角こそうを
しくもあるかかしくもあれ
二月晦日　正鐵起
正久援
腹立ること

上略

一腹を立いぬ病氣ふぬ困の由ぬ尤ぬ産

い歪ーぬ存いても氣力ぬてハ歪ぬふゆい

只く慢行の德ぬて少く宛も歪りゆい事故

ぬ彼者一ぬ産い怪ぬ産ぬ怪ぬふ怠ぬ歪ぬくいへ

い除く落らぎてゆい怪氣ふもかゝる病あ

る故人ぬも色ゝの病あるべくと思ぬ他の

人を憐ぬ産ぬ抱ぬ成い損思ぬいちゝ氣病

貝原養生訓に
忍ハ身の宝ぬ忍べ
ハ殃なーぬ忍ざれハ
殃あり忍ぶハぬら
ぬるぬ慾ならざる
を云ふ怒ぬ慾とハ
ぬのぶべー
武王銘曰忍之須臾
全汝軀
莫大之過起須臾不
忍

い歪ら怪ぬも又他人氣を抱弦呉いと思

ぬ産ぬ苦勞ぬ怪成冒爰い兎角心ぬ病なき人

い者人も多くい冒病多ものどふーぬ抱弦

ーぬ合全快の時を産ぬ他て怪成い少子始病人

ふい冒産ぬ抱彩入い病治ぬへいへば歪ゆい

病さかぬぬまぬい抱人ぬ理でこりゆ者ぬ

産ぬ

守ぬ者ぬりーてもらふ他力雄の神

天手力男命ハ天照
大御神の御手をと

りて天の岩戸より引出し奉りし事ありこゝの歌ハ手力を他力と書て自他の事を云ふ思ふに手と他の字音ふなづこてかくハ云しる猶考べし

のめぐこそうきしこの世けるる

我等ハ同じ中厚くゐ抱ハ法ハ下ハまゝめでたく法

命わ續いさしく人の抱も波中ハ多

ゐ産ハ多ハ病あるものハ歩行いさし難き

人の病を助け我身のきゝぬハ多ふ病をき

人ハ抱を交ハより外の事ハなくハ我病

少しも治ハ居ハそゝゐ心を人の病ゐ抱

て法ハ古奇ハ

病子をだ少してこゝハ旅の宮ゐハあ

とハのこ里こそきれ

そもゞ抱ハ限く病も快宅の事故親兄弟

のゐ病ゐ抱ゐを法ハ我等も病人

を助けたきの病ゐ苦ハ中ハゐ抱新

入ハ抱の数ゐ同じ中へもゐ吐て法下ハ

おいなゐへも別ハ父母上変ハへども出

船ゆゑ辺ゑ上ふゆゑ氏文の新古世下さる
べくゆゑ奇一首遠送下ゆゑ傳下さる
ぞくゆゑ歌ゆゑ相見いさゝ隠く古修行
出来ゑ文事ふゆゑ船よりそる意の古言おも
しろし

思ひどおもふても又八重雲のかゝ
るおもひいつるゝゝと
かへし

村越治郎兵衛正久の妻こ

思ひどおもふも物をおもふなる雫
とほかみのてら次日のもと
色〻中入次ゆゑ共又こ坂使て中入ゆゑ上
三月　正鐵

一つ心

上略

おきく様

信心修行二つは成ふやうに扶ける心を社成べ
くいおほる清書はかき送る中に奇
二つなく一つんは定まで思ふ事こなの
まとこそたなれ
扨こ雑ゐ事は百屋に家来と成てい天は仕
ふるの一つ子としてハ親はつこのふるの一
つ妻としてハ夫は仕ふるの一つ武三つハ
人の道まて社守まにハ神明の加護は誠

まで中に併なごらいまゞ人間の百色分
も易くんも安くと中所へハ糸り不中に神
明は仕へ身も命も惜まゞと推果にへバハ
百万の神の守護は誠まで必ず彩として成就
致し身もんも安く常はよろこびたのしこ
まで中に宛角んの苦しきハ未ゞ修行の行届
らぬゆゑはいよ〳〵信んつのまで中に
一常盤橋へ出のよに骨折て社成に一

心の誠い鬼神も感ぜしむる若ゑ江戸屋い式
節故合も宜しきゑ依て式母方へ江住居の
よし江中越ゑ玉極宜しく存い此冨尚地へ流
船来ゑ生ゑとの中いゑい江戸大火の由日本
橋ゑも焼いやうゑ承中い此母宅も類焼致
いやとあんじ中いおつる事いこのゞ致居い
やゑ中越ゑ江下い
一江送ゑ掛江つ中方江骨折の品扱ゑゝを

付て中の由ゑ江尤の事ゑ江屋い素ゑゑ神明
の江養と存い百大切ゑ致し少子事ハ麦又
ハ粟飯二椀朝夕ゑいたゞき昼ハさつま芋
をたべ情こ裏生いたし中い扱少子分ハ
何も入用ゑくしへ共兎角流人い掛入多く
困ゑ江たゞ笠冠の分の上何事も行届ゑ涙
出入い事ゑ江せ我の白ゑ
いこのめしき書やあらきの檜笠

いつゝ此笠をぬき大空を一度ながめ度存
ぜんと夫のこゝ心部屋より庭に出て祭て給はゝ又こゝ後
後ゝ中入はゝ上

午三月七日　　正鐵

男也とめ

分分
出分分こゝ義に出尋に尤の事ゝは当時に神職
冥しくと存ぜ世渡とて別ゝはこゝ神道
修行ゝに庭に神の出裁ゝはゝ分も安くこゝも
安く家内も安くとの事ゝて出庭に嗟嘆天
皇の出言葉の天地の養を知る板こゝと中所
へ出こゝを付に出考へて此成に天地の出こゝゝ
叶ひゝに中事ゝは第人をして我分のぬく
思ひ人の悪敬を見てゝ情なき事ゝ思ひて
おゝ隠もやうゝ思ひ人の若きを見てゝ我

善を成せしやうよ歎び人よも志らしむる
やうよ思ひく人の安きを見ていい我安き樣よ
思ひいたく天地の心ん叶ひて神明の德
を得べし兒角人の中事も古人の言葉も我
思ふ樣多な所でかをん付中ものよ出産い
孔子の言葉ふよ人の惡をかくして善を誉ぐ
とゑさし佛祖ハ衆生入こく我入こく衆生出
こく我出こくと中いよし能く出考なさる

べくいき樣よるを示く衣食よ困い人あるべ
くいを人くの事をかなしくて我弟しきを
忘れ歎て社成い
人をたゞよ上よめゞつく樣よそふあしま
の蟹のあさましき世や
神職ハ神よ仕へ中い身分よ出産い百我身
の事をヨセれて神の心ん叶ひい樣出修
行いたゞ必ず神德を蒙るべし我身の為父

母妻子の為ゝ天ゝ仕へ申いたゞ天地の広
ゝゝ叶ひふゝ神明を失ひて申ハ我身を捨
妻子をもて止事を得ざる時ハ父母をも捨
天をたゝけ國の人を扶ゝいたゝ神明の広
ゝゝ叶ひて申ハ修行を致ハ内ゝ衣食を思
ふべゝら涙簾食ハ體の養生少食ハ神事を
まし是又養生簾服をゞ為なるハ害行なり
とゝ將て申ハ熊く断食をし害中水を浴て
さへ修行致ハ若もゝこゝ神の広方より
修行広きいそくとゝ切邪を思ハいたゝ孫
修行出来て申ハ先母妻子を安く亡ハ事
の出来ぬも修行の足らぬ故と天地の広ん
ふ叶ひハやう広修行て注敬ハ

三月五日　　鐵秀辰　　正鐵

加藤勇司氏ゝ即直
鐵氏の父ゝ

光陰矢のごとし

申六月中は書面ハ届致拔足は先は京内
模路は信心は堅固は修行し面大変不るてく
存は少子すも安子子至は百は安心下さる
べくは
一多義形入は乞ん中しは変は送至下され
那ゐを存は送拾し言ふハ暫は世話の由
另也秀三より申越ハく信心厚きの成を
取と欲び中は此節朝夕祈念の外ハ何を神
明へ百を乞は庭は やは模子承至変は先達
て中ハ百を乞の麦買は沙汰ゐくしは取至後
如何、百番は やハ承至変は滅る光陰ハ矢の如
くとの諺のごとくは別老中して六年の事
月ハ立中は少子事も来年ハ六十歳ゐハ成
は へ共格別の事出来ふ中は て神明ゐへは
を乞の中沢江こし事ゐて百庭は但身体健成

ことハ相智ら決ハ是ハ朝夕ハ祈念長息の
徳疑ひなくハ譬へバ燈火のゝくまて浮世
の風まあひハへバたわく油つきヤハ又燈
ん多く入ハへバ油減ヤハ浮世の風とヤハ
ハ貪欲又ハ悪念怨癡の事まてハ燈ん とヤ
ハ食物の事まてハ油を決ぎ是ヽヤハとヤ
事ハ此被長息の徳の事まてハ光きバ此被
長息の徳意まなく修行致ヽ廉食少食なれ

バ自ら長寿なるべヽ触く此勤長寿ふヽて
永く神ハへ此事ハ此ハ回ぜんのわき者
も空功成べくと存ハ内方様へも触く此
中て決下ハ少子ゟも嗤氏事奇用と存ハま
まる一まわ勤ヤハ
一梅辻発孫の書状届け方分是薗ヤハよヽ
扨く此用多の中へ色く此面例故義中上此
家の毒まを存ハ何分ゟも分是ハたヽ此届け

て法下は梅辻子爵へ参堂對面致し取紙
学者生上加茂代々神職にて古く家に傳ひ
神傳極人切居して少子も欲び駐守致し傳
を授る中に事ゑくしに仕併大切の信心なき
人にて紙掛知る所度は右の仕合の書状
等を授る所中上は神明への品を云と思召
て法下は神代奏板の事別陸郷ゑ傳なども更
中に付只今この少子用ひ本を捨大関

云の品版の本を用て中と存に付先達て
秀三方を中巻に取右本須原屋に売し冨
合不中に何とぞ秀三と品わ様法下品送る
法下は損事致し又品送掛の義に付秀三
方へ書に書面を品覧の上品わ様品取計ひ
事致に秀三宅損若吉板送り掛の事にて格
別に品骨折法下に事扱紙こ書面品覧の上
品世話厚く事致に色々中上度に共又こ

て中入は早く形そ

九月七日　　栖原庄助様　　正鐵

四命四恩

襖障子の上のらは四命と申事を承へ命は
遠すざるを信心を得たる者と申事は其
四命と申は先神の命は遠はざるを本と主

主の命親の命師の命是を四命と申は本神
の命にて主と成親と成師と成事は百主
親師の作を神の命とんはべし女は夫に随
ふ者なれば主は主とんはべし又四恩
と申も此四つの事にて四恩の廣大なる事
別命を尽して仕へても報い尽し難し故に
先生作は背く事なく仕へまるを恩を知る
の始と成善悪の理をも打捨是を勤め守主

給ふゞ天地の正んを叶ひ神明の助を蒙り後必幸を受るとのたまりもしかくなさばよ
このらんかくなさばあしこのらんと我汁ひよ
て利の宜きまつこのゞ一たびはよくも後神
明の助を共ひかたらゞ苦しきを受べし唐
國の二十四孝と申いも智恵才覚汁らひよ
ていあらゞ能親の仰をそむこのゞ志ふ隨ゞの
ひ大切ふ思ふんより若恵のみどをも打と

き親のんを叶ふ損を仕へいまゝ天地の
正んを叶ひ神明の助を受しよしを偽へ哀
へ申い事を知智恵才覚汁らひの事をはあ
らゞ孟宗ゞ筆も郭巨ゞ釜も我汁らひあら
ゞ何ぞ將る事のあらんや是神明の助くる
所能く考見るべし神の正哀はは我と悟る我
智を增し若恵を汁らふ損なる六ゝしき事
をてはなくたゞ神の正偽を受四命を守若

恵を神明ふ任せまる故神の方より智を授
け給ひ自ら明らかふ安く見を神明の徒と
申事ゑて出産はたゞ神の正んふ随ひひ外
ゑ智恵も才覚もいらぬ唯一の教と申
事ゑて我らゞ身ふ叶ひ仕へ安き正教と五
び申は事ゑてい

よーあーのゞんひを神ゑかけまくも助け
たまろる身こそたのしき

主んの宮

上略

主んの宮と申事ハ信ん素淳の者を申は
猶其心急りなく相續致申はを主んと申事
ゑて出産は外ゑよ主んと申ものゑらしはなど
申はハん切遠の事ゑ正産は信ん急らび相
續のものゑ主ん宮ゑはと申事ゑてい

一問答書和漢語句覽のよし和漢語句ハ人く
の心こゝを中ハらものゝて苦きもあるを悪きも
あるハその板皆よきと中事ゝてハなく家
ハゝて苦悪を定ハへハ家好方ぞこのを冥数
思ひ中そのゝて我ゝよ叶ひ不中ハ事ハ悪
くゝ思ひ中ハ実の苦悪分ゝを悪中ハ百和漢語
ハあてゝよ和成ふ中ハたゞ苦き人の古語の
意を見出中ハゞ冥〳〵くハ句覽ハ本ハ近く

ハ神君様ハ一代の書又ハ二代三代様の句
事ゝ苦るしハ句書物又三代様ゝの句方様の
句言葉ハ神語ハ句産ハ百句集て成ハ私
も拝見仕家存ハ選て記下ハ生外三代
様ゝの重き句役人様方の伝ら色ハ事別て
蔦眼大師土井大炊頭板倉伊賀守同周防守
酒井雅楽頭井伊掃部頭青山下野守武ハ方
方の句言葉ハ神語ゝて神徳を得給ひ〳〵ハ

方々より庄屋に百あつめて注成に勿論偽
誤に事もみくしに百能く庄せんさくなさる
べくに右書集をにたゞ庄送をて注下に尚
地生事ふ自由ゆて国を中に神代巻古事記
式書抱も色々偽へ庄屋へ共本居古事記
偽冒しくと存に本居ある故少子始め古事
よくをろを中に那ろ人ゆて庄屋に
一庄神前ハ庄境を庄神祭と成され幣を以

て庄神祭と成さきにて冒しくに怒り方
男也よを庄守て注成に產霊の偽より庄屋に
產霊の者庄霊降れ勤に事ふ庄屋に伊勢よ
を糸りに被ハ穢き不浄を被にぬさゆて
庄霊を怒を人を產霊と中に產霊の若の
勤に役ゆて庄屋に伊勢ハ古へハ神宮掾倭
姫掾の庄役より庄屋に思ふにを另也より
庄怒文て注成に夫とも式方へ庄境注きに

たゞ以然上て中は都鼻ハ三本まて以
産は
一父母と和合する人と和合せぬ他の人と和合
の事ハたゞ以被聴守僧行ふ以産は僧行だ
ふ出来はへバ和合出来中はるまは
十種の神寶の事ハ問答書略注に委〜付て見べ〜
一十種の神宝の事ハ産靈の信まは以産は事
まて退くまて中上は
下略

右ハ以弱の頼あらまし中上は中く筆殘ふ
尽難くは

武亂反　正鐵

生子教子

閏九月中書面ハ届は愈信ん堅固ふはよ〜
大変存は此節は本下川以世話まは成居は

親少子より於ても大恨存ぜば滅す大恩の人より
恩産ぜば至人とも親とも存じ大切に勤仕致
ぜば授存ぜば只く諸藝を学ぶも恩を報じまる
為まて已ぐ為まあらば若已ぐ為めに藝を
学ぶまじ援必ず慢心をおこし諸神捨給ふ
べし立身出世も皆已ぐ為ならば報恩をば
へざる恩を忘るゝ者は邪の道なり幼と
のを子なりと思ひ恨こと悪事あるまじく邪
なる者を見ては あたまと思ひ我に敵對者
を見ては我師とんぬ恩ある者を見ては た
まけ救ふむ事を思ひ貴くかしこきを見て
は礼を厚くして敬ひ学ん事を思ふべし人
に問学ぶ事は道に入のつゝ恥とゝふ事か
この事問学ぶさるを恥辱とせよ恩を知らば
是を默んといふ能恩を知て常に報ずむこ
とを思ふ者は人なる人といふは日止の事

まて天の徳を得るをいふこ
人多き人の中にも人ぞなき人になきを人
人になせ人
滅小邪を除奇こ能くあぢをひ張ふべし又
恩の廣大なるハ主君親師匠なる三つハ何
も大小あるべからず能きども居と成て
ハ君を重しとし子と成てハ親を重しとし
道においてハ師を重しと涙肝肝を悩まず

恩報の為に仕べし是を失さるを信心と
中事にハ報ゆる在し時ハ生涯若年にして
未だ費ず今遠く別きて教る事あたゝず
報志をつぎ主鐵雲神の志をつぐ者ハ生涯
なるべし能く考へし唯一問答ハ永ゝを書
しいとの板朝夕肝をたなさゝよみ張ふべ
し漢書百扁書自ら通ずといへ是我ゝを知
る者ハ此書こ必ずおろそかにすべからず

法の子い弟一血脈の子い生方の外ゑ傳ふ
るものなし日本ハ血脈をゝるぶ國こと思ふ
べし志ゝきども氏志をつゞざれバ子とも
る事なし子孫ゑあるべゝらゞ色こ中入変
いへども氏変ハ出船急ゑ付荒こ中入ハ軽
氏書木下川西去人へも氏見せて法成ハ以上

正鐵

祐鐵どの

り〳〵必く次郎名法の事そむき中百変ハ
外んなくたゞ一もぢゑ身をまゝ世事ゐ
〳〵学び弱ふべし

奈志の文

別紙の趣委細ゑ被見ハ兜角ゑ名ゑ迷ふ
べゝらゞ名ハ氏方よりの付ものゑて氏産
ハ人も生を出し時名なし援ゑて付中ハゑ

て出産は神も自ら香ハ神なりと申されは
ふハなく凡人出来は百神と中上神の倍へ
出来申は凡人なけきハ神の神の道のと中
事をしは悪人あるを悪人の名あり悪人
なけきハ善人なと中名なし光子経の始の
一章式をを中はまて出産は釋迦も己より
如来と中はまてハなく弟子の如来と中は
まては天照太神も自ら天照太神と出申

まてなく生出徳をたゝへて中上きりは事
まて出産は必ず名形まよふべうら名
ハ凡人の耳まを穿形ハ凡人の目まを見え中は
中庸の書の末まおとともなく香もおくいた
きをと中はハ式事まを出産は但し初学の人
ハ形より外ハ耳まを穿事鼻ふかぐ事別まさ
ハる事より外の事ハ志らせ度も志らせ揆
なくは百まづ形より志らせ耳に穿せ香ま

ちらせ中は生上ハ妙と中はう神変不思議
なゞ中はうより外よちらせやうなく又ハ
空なゞ中は大空の中よ一つの物なきをと
中も色香形のそゞめなり扨よ神代巻よも
その生形いひがたしゝと中は先初学の人よハ形
ふよりて表へ中はより外なく居所を立て
表はより外ハなくはいろ〳〵中入表はへ
共筆紙よ尽しかゝくことのをよつくゝか

たゝ古歌よ

君ならでたれをかまさん見せむ梅の花色をも
香をも知る人ぞしる

伊勢大神宮へ西行の歌を

何さまのおいしまゝこのハちらぬとも
見かさよぞなるだこぼる

花下大明神百歌宮の時の句

何の木の花とも知をぬ匂ひかな

なんまもなしーふーの種うら花さきて実と
なりあゞるあぢいひいなんといたふらい
ひよゞないうまいうまいうまいおまへも
ひとつおあこのまーヒーゞたべうけを
くひうけいあまり不礼とおもへどもな
んまもなしーのあぢいひのよさ
うまいーあんぢいよーおほくの人よふ
るまひてよろこをせんゞヒーやうきーふ

坂田鐵安翁ふて信
い花押の文字ふり
ちうも此時教祖よ
り書判ヨ用へよと
て賜ちりー者ふり

お止出

信反

んでうれーいヒーやちらん
ろなーの ちんヨなきー
式ちんとやいはおひうたなーの ちんだらう
ちんゞあるとゞもできる皮もできるそこ
て人ヨなる
神君四ふヨ

人おやき人の中まも人そなき人ふなを
人人ふなせ人
あんまり人といふ字ゞおやい色ゞ天人七
代といふ事ろも志をぬとろく志をぬとこ
ろまあぢハひゞある
何事もちらぬ式身をうれしくもるらせ
たまふ天照主神
玉の緒巻一終

明治廿九年九月七日印刷
同　年九月十一日發行

版權所有

著者兼發行者　東京府平民　坂田安治　下谷區西町一番地
印刷者　東京府平民　江川八左衛門　神田區千代田町三番地
發行所　東京市下谷區西町二番地　禊教本院